

センス・オブ・ワンダー自然観察会

2016年7月3日（日）10:00～12:00（於：小石川植物園）

参加者 12名



梅雨の最中に猛暑日となった7月3日、小石川植物園で自然観察会を行いました。テーマは「センス・オブ・ワンダー」。五感を使って自然を感じ、自然の中で新しい発見をし、自然の仕組みを考えます。お馴染みのクッシー隊長の号令のもと、まずは恒例の準備体操。目を閉じて耳を澄まし音を感じる。風の声、車の音、人の声など様々な音が聞こえてきます。次に目を閉じたまま体の正面で太陽がいる方角を探します。みんなその場でくるくる回っています。目を閉じていても明るい方向や暖かい方向がわかります。最後に風が吹いてくる方角を体の正面で感じ取ります。風は常にいろんな方向から吹いてくることわかりました。五感を研ぎ澄ましたところで、さっそく園内の散策に出かけました。

入口付近にあるソテツや大きなバナナの木は熱帯のジャングルにいるような雰囲気です。鮮やかな黄色のチュウキンレンは花びらだと思った四方に開いている部分（20cmほどある）は、実は苞（ほう）であり、苞の付け根に見えるたくさんの小さな筒状の器官が1つ1つの独立した花だと知って驚きました。



日本のメタセコイアは戦後日本に輸入されたため、樹齢は最高齢でも 60 年くらいとのこと。大きなヒマヤスギには球果が実っていました。1つ見つけると次から次へと沢山の球果を発見することができました。夏みかんの葉は太陽に翳してみると無数の小さな穴がぎっしりと詰まって開いていることも発見しました。それはまるで小さな宇宙。プラネタリウムのようなものでした。でも最初は小さな穴を見つけられませんでした。カーソンの書籍「センス・オブ・ワンダー」の中に書かれている「見ているようで実際には見ていない」というのはこのことかと実感しました。汚れた 10 円玉をカタバミでこするとピカピカな新品に生まれ変わったのにはビックリしました。参加者の皆さまも新しい発見をするたびに感嘆の声を上げていました。



またこの植物園は東京大学の附属植物園でもあり、植物学の研究・教育の場として、数多くの貴重な植物に出会うことも出来ました。遺伝学の基礎を築いたメンデルが実験に用いたブドウの分株（メンデルの葡萄）、ニュートンが「万有引力の法則」を発見したときに見ていたりんごの木の接木などなど、

320 年の歴史を持つ日本で最古（世界で 2 番目に古い）の植物園だけに、沢山の樹木が空高く生い茂り、その大木の枝が沢山の木陰を作り、園内は絵葉書のように美しい風景でした。最後はクッシーさんの指差し棒をマイク代わりにして、参加者のみなさまから一言ずつ感想を発表しました。自然の不思議さや素晴らしさだけでなく日本の歴史も感じた素敵な観察会でした。



(文責 柳澤)